人がつくった都市の水辺

陣内秀信

はじめに―水都の中心エリアの空間骨格

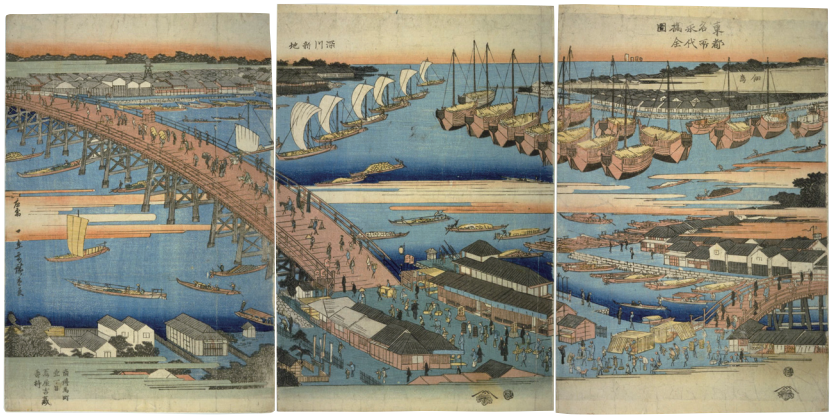
東京を「水の都市」の視点から語るのに、江戸時代、徳川政権のもとで壮大な城下町としての水都づくりを経験した都心、下町が先ずは主役と考えてよいだろう。

武蔵野台地の突端に太田道灌が築いた中世の小さな城を核とし、大規模に拡大された江戸城は、内濠、外濠で二重に囲われ、その東の低地には、埋立てにより、掘割が網目のように巡る水の都市としての下町がつくられた。江戸時代、佃島の沖合に停泊した全国から集まる大型帆船の荷は小船に積み替えられ、内部河川を経由する東北や地廻り経済圏からの荷とともに、江戸市中の掘割沿いの河岸に並ぶ蔵に運ばれた［図1-1］。その舟運による物流の大動脈が日本橋川であり、その中ほどに大店が集まる商業・金融の中心、日本橋が存在した。

こうして多くの掘割が巡っていた現在の中央区を中心とする東京の都心（かつての下町）だが、その水路は震災、戦災の瓦礫処理の埋立てに加え、１９６４年の東京オリンピックの直前の都市計画でほとんどが姿を消した。だが、日本橋川、そこから分岐する亀島川が残る一方、舟運が強化された明治後期にむしろ日本橋川と神田川が繋がり、おかげで日本橋川・神田川・隅田川のループを船で周遊する楽しみを今、味わえる。

第1章で紹介するコース

第1章では、隅田川を中心として台地を利用した城下町と低地につくられた下町という江戸の町並を基礎に、近代まで水運が大きな役割を果たした「水の都市」東京の、都市部の水辺を紹介する。



［図1-1］一立斎広重「東都名所永代橋全図」（国立国会図書館所蔵）

◆コース１　隅田川
江戸東京の「母なる川」隅田川に沿って、聖地と遊興地をめぐる。

◆コース２　日本橋川～神田川
水都東京の「メインカナル」日本橋川と、近代の物流大動脈神田川をゆく。

◆コース３　内濠と外濠
地形を利用し、改変してつくり上げられた江戸城の巨大な水循環システムをたどる。

◆コース４　小名木川と深川
江戸時代の掘割が残る水の町、深川を船でめぐる。

◆コース５　東京湾
中世から続く漁師町、幕末に築かれた台場など、東京の歴史を船の上から眺める。

隅田川の特別な価値

江戸東京の水都の中心は日本橋と言えるが、人々の間で「母なる川」として親しまれてきたのは、実は隅田川である。その地理的位置とこの川が果たしてきた

Course 01 隅田川

所要時間 約3時間
水辺感：★★★★☆　自然感：★★☆☆☆　凸凹感：★☆☆☆☆

聖と俗を併せもつ 母なる川、隅田川を体感

江戸時代、物流や交通の大動脈として重要な河川であった隅田川には、古代、中世にも宿場や聖地が存在していた。花街として栄えた柳橋を出発し、江戸時代最大の盛り場だった両国広小路跡、遊郭吉原に向かうチョキ船が行き交った水路跡、山谷堀公園を歩き、奥の秘所へと続く動線の演出をたどる。また、待乳山聖天や、木母寺、隅田川神社など、奥へ行くほど古代から続く聖地が残る、聖なる川としての隅田川を体感するコース。

聖なる川、隅田川

江戸の信仰と遊び（聖と俗）の痕跡をめぐる

1 柳橋

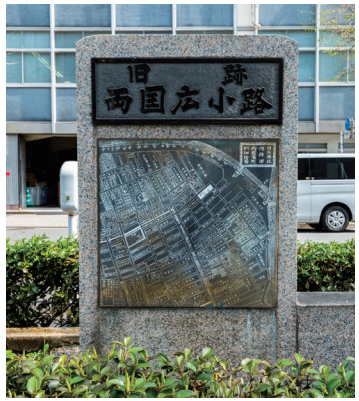
神田川が隅田川と合流する河口、柳橋界隈には今も屋形船が並び、わずかに江戸情緒が残っている。幕末から明治以降、この辺りは隅田川に面して料亭が立ち並ぶ花柳界として知られた。高度成長期に河川の汚染が進み、現在はその面影はほとんど残っていないが、近くの石塚稲荷神社の入り口の柱には「柳橋藝妓組合」「柳橋料亭組合」の文字が刻まれている。最初の「柳橋」は元禄11年（1698）に架けられ、江戸時代、歓楽街としてにぎわう両国に近い柳橋のたもとは、吉原方面に向かう船を仕立てる船宿が並んでいたそうである。現在の柳橋は昭和4年（1929）に永代橋のデザインをモデルとして建設された鉄橋である。

柳橋から神田川上流を臨む

石塚稲荷神社

2 両国広小路跡

柳橋から南に下ると、両国郵便局通りと京葉道路に挟まれた緑地に「旧跡 両国広小路跡」の石碑が立っている。明暦の大火後、隅田川に両国橋が架けられ、火除け地として設けられた広場は常設の建物が認められなかったため、仮設の見世物小屋や水茶屋、屋台の露天商などが立ち並び、江戸一番の繁華街としてにぎわった。今はその面影はなく、石碑が建つのみである。



旧跡 両国広小路

3 回向院

両国橋を渡ると京葉道路沿い右側に回向院正門が見える。回向院は明暦の大火で犠牲となった身元不明の人々を弔うために建てられた。かつての正門は、手前の一の橋通りを左に曲がり、現在の両国幼稚園のところにあったそうである。両国橋を渡ると真正面に回向院の正門が見えるように空間がデザインされていたのであろう。勧進相撲興行の中心地でもあった。

回向院 現在の正門

武蔵野台地東北のキワ

石神井川の渓谷と崖線を歩く

1 飛鳥山公園

八代将軍徳川吉宗によって花見の名所として開発され、江戸時代の行楽地となった飛鳥山。北側から見上げるとまるで山のように見えたため山と呼ばれているが、実際は上野から続く武蔵野台地を石神井川が削った河岸段丘だ。明治になると渋沢栄一が王子製紙（設立当時は抄紙会社）の工場を眼下に見守ることができる飛鳥山に邸を構えたが、庭園の築山は近年の調査で古墳であることが確認された。旧渋沢庭園内にある飛鳥山1号墳の解説板によると、1号墳は古墳時代後期の直径31メートルの円墳で、平成5年の調査により切石を使用した横穴式石室が確認されたとある。庭園内では2号墳、3号墳の円墳周溝跡が見つかっているそうだ。台地の東側の崖地、飛鳥の小径川では湧水も確認できる。

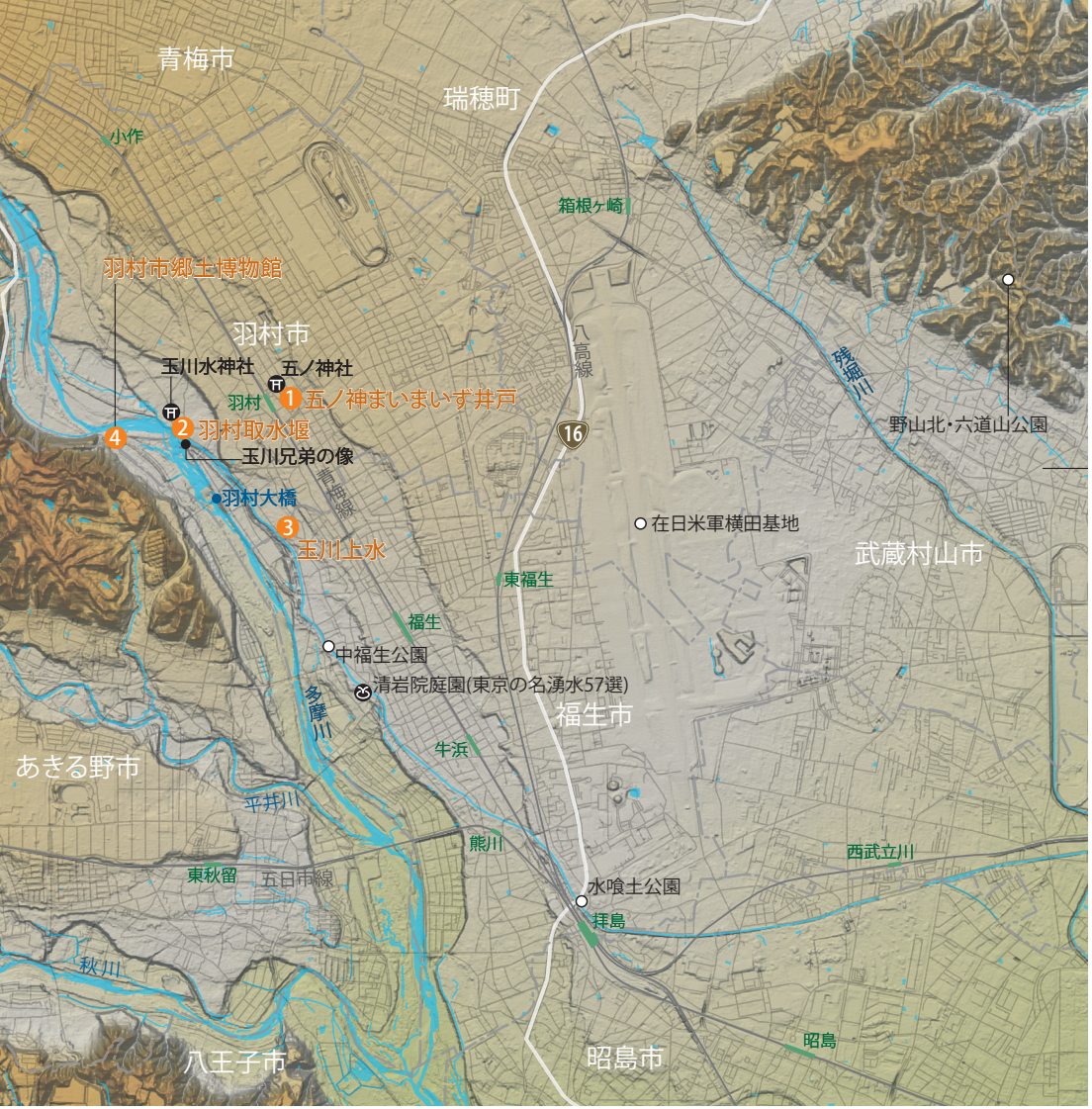
飛鳥の小径側の湧水

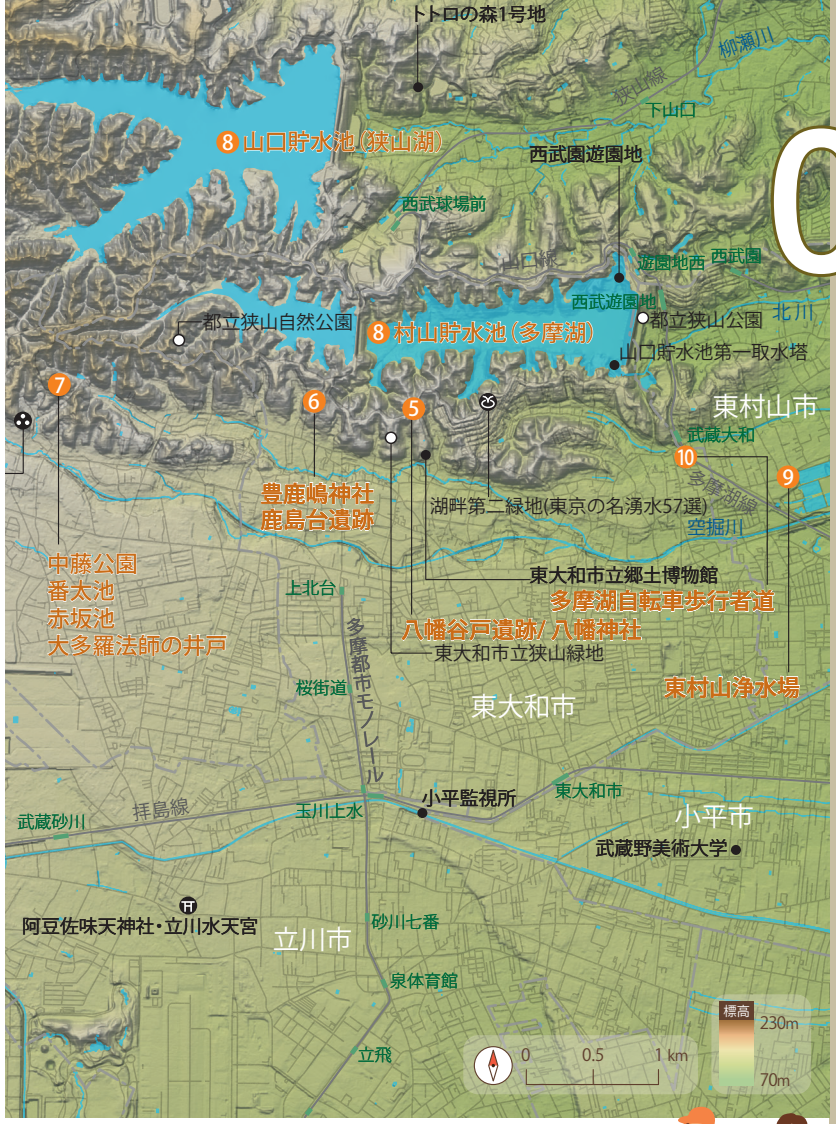
飛鳥山の東側は崖になっている

2 音無親水（おとなししんすい）公園

音無親水公園は石神井川の旧流路に整備された公園で、水辺を楽しむことができる親水公園として整備され、〝日本の都市公園100選〟にも選ばれている。江戸時代は飛鳥山や王子稲荷といった観光名所があり、滝のような川、滝野川と呼ばれた石神井川は、渓谷の風光明媚な景勝地として多くの人が訪れる観光地だった。現在の石神井川は、音無橋の上流で暗渠となり王子駅の東側へと流れている。音無橋は神田川に架かる聖橋を思わせるデザイン。

音無親水公園と音無橋





\Course/

02

羽村～狭山丘陵

所要時間 約4時間（自転車利用の場合）
水辺感：★★★☆☆
自然感：★★★★★
凸凹感：★★★★☆

東京の水は
どこからくるのか？

東京のくらしを支える水源と水を得るための技術の進化をたどる

武蔵野台地の中西部は関東ローム層が厚く、水を得にくい地形で、古代の遺跡は湧水池や谷戸、崖線の近くなど、水に恵まれた場所で多く発見されている。江戸時代になり人口が増大すると大量の上水の確保が必要となり、羽村から多摩川の水が取水され玉川上水がつくられた。現在はダムで水をせき止めた貯水池が東京都の水がめとなっている。水を得るための技術の進化を見ながら、羽村、玉川上水、村山・山口貯水池をめぐるコース。

東京を支える水源

水を供給するテクノロジーの変遷をたどる

① 五ノ神まいまいず井戸

JR羽村駅東口のロータリーの向かい、五ノ神社境内にまいまいず井戸がある。地面をすり鉢状に大きく掘り、底の部分から短く垂直に井戸を掘っている。井戸までは斜面を廻るように道が設けられ、あたかもかたつむりのうずまきのように見えることから、まいまいず井戸（まいまいは「かたつむり」を表す地域の言葉）と呼ばれている。武蔵野台地の中でも中西部はことに水が乏しいところで、地下水脈の位置が地中深く、水を得るためにはくずれやすい砂礫層をかなりの深さまで掘り下げる必要があった。そのため脆い地層の崩壊を避けるためにらせん状の井戸が掘られた。この井戸は鎌倉時代に掘られたと推定されているが、当時の技術ではこの深さを垂直に掘れなかったと考えられる。五ノ神社はもと熊野神社で、推古天皇9年（601）の創建と伝えられるが、神社とともに井戸は村落の中心的な施設として使用されてきたものと考えられている。現在は東京都指定史跡。

まいまいず井戸

羽村取水堰

② 羽村取水堰（はむらしゅすいせき）

羽村駅の西口から多摩川に向かうと、1キロほどで羽村取水堰に到着する。羽村取水堰は、江戸の人口増加に伴い水を確保するためにつくられた玉川上水の取水口（水源）で、上水と同時に建設され、承応2年（1653）に完成した。明治33年（1900）、大正13年（1924）の増改築を経て現在に至る。固定堰と仮設堰（投渡堰）を組み合わせた非常に珍しい型式で、台風などの洪水時は、投渡堰を取り払うことで河川水位の上昇を抑え、堰の安全性を確保している。投渡堰は昔からの技術が途切れることなく現在まで伝わっている。現在は、取水した水は、村山・山口貯水池や小作浄水場へ導水しているほか、玉川上水を経て、東村山浄水場にも導水している。

羽村取水堰